

わがふるさと、元田誌 (五)

— 祭りごと —

会員 市野瀬 仁

(弥生町大坂本元田)

元田で行なわれている祭りごととは、天神さん、山の神、神武さん、火伏さん、それに植松の愛宕神社(八月二十四日夏祭、獅子舞と杖踊が行なわれる)がある。仏教の行事は、これと区別して取扱うことにしよう。

天神さん

私たちが村には、本田・竹ノ原組の祭る天神さんと、荒木組の祭る天神さんがある。植松の霊峰尺間本教本庁の古い記録によると、次のようである。

ご祭神である天徳日命は、天菩牟能命と同一神である。従って牟能命と比命(大分の神による)は字が異っているだけで、二つの天神は同じ神様を祭っていることにならる。そもそも天徳日命は、天照大神と素盞鳴尊の間を生れた五男神の一人で、天孫降臨のさい、大國主命のいる中(國(出雲)に派遣された國造の祖神である。犬分県では、この天神社が一位で断然多く、山ノ神の信仰が二位となっている。

本田の天神は、大岩の下に「九万龍王」と彫られた石がセメントで成りまわされて、こぎれいに祭られている。これ

は、村のある人が厄病除けに祈禱したためのもので、わりに新しい。石の近くに土輪の塔の一部が安置されているが、これは工事のさい、土の中から掘り出したものとされている。祭りのとき、天満宮の旗を立てる石柱は、明治四十一年と刻まれており、元禄二年の創立という記録と合わせ考えると、長い時の流れを感じるのである。ここでのお祭りは正月の十五日、天神の境内で、札を供え、神社の土地の小作料と、各家から徴集した十回とを合わせて、神前で酒を汲み交してきた。しかし今はしない。

荒木の天神さんの前には、舗装した道が通っており、荒木川を脊にして新しい社である。前は桜の木が一本あるのみで、吹きさらしとなった境内はまことに寒々としたもので、ふくろうの鳴くこととしたりした神社の森のイメージは、全く湧いてこない。事実この境内は、大正元年と昭和十八年の大洪水で洗われており、昔から何回となく様相を変えておるようである。

荒木部落は元田の祭祥の地として、天神さんも立派であった。それを証拠づけるものとして、神武さん(後述)の頂上に、二つの御神燈と鳥居の柱が一本横たわっている。



荒木の天神

ご神燈の古手のものには、「市野瀬宗甫・同 新左エ門・右イラ名右エ門」とあり、左手のものには「長治工門・氏子中」とあり、鳥居には「維時慶応二年」と刻まれている。これらは荒木の天神さんから運び上げたと伝えられている。どうい理由でおどおど運び上げたのかその

記録もないし、たしかなことを知っている人もいない。ただ、神武さんを始めてお祭りしたのが、明治十年頃ということは確かである。

荒木の天神さんでのお祭りは春・秋二回にわたり、お酒に、魚、せんざい等をご馳走する外、お社の水洗いがあつたが、それとだんだん簡素化されてしまった。

荒木の天神さん近くの荒木泉氏は、荒木と本田との天神について、このように述べている。

明治三十五年頃のこと、この村に神社の合社（合併）の気運があつた。その時から、荒木と元田の天神様のご神体を、植松の愛宕神社に合社して、お祭りを夏冬の二回にしてきた。

ところが、昭和四十六年一月一日、荒木組は天神様のご神体を、以前の天神社に御勧請できないものかと協議して、結局石の祠と神殿を作ることに決定した。石工は藤野の植木正志氏、大工は門前の甲斐博文氏が担当した。現金二万七千円と、用材はすべて寄付であつた。こうして荒木組十二戸の協力により、工事費十万六千九百三十四を以て、同年十二月二日に完成した。

天神様のご神体のご勧請については、高司宮司にお伺いしたところ、現在、荒木・本田（竹ノ原を含む）の二体を一緒にお祭りしているのので、できれば荒木の天神社地に、同時に勧請したらどうかということ、元田部落の方々に協議した。昭和四十七年四月十八日、元田の総会で神官高司宮司に一任した。

十二月一日夜のこと、愛宕神社で部落一同神官と共に参りし、深夜、杖踊の奉納もとり行ない、神にお伺いされた結果、荒木天神社に合社することに決定した。そこで十二月十四日、愛宕神社から荒木天神社

地は、荒木と本田（竹ノ原を含む）の二体のご神体を正式にご勧請できて、今日に至つたのである。

四十七年までは、元田の天神跡地と金一万五千七百十四円は、中組と下組で管理していたが、合社により荒木の天神社地と共に元田部落のものとして定められ、昭和四十八年からお祭りは部落一同で行なうことになつた。

お祭りの順番は三戸が当り、荒木からまわり持ちと定め、御日は四月末日とし、夏冬のお祭と共に年三回と定められたのである。

### 山の神

荒木川に沿つて、山の神が二か所祭られている。尺間本教本庁の古文書によると、

○ 同所ノ本本田村 頼戸山 鎮座

一、石 祠 祭神 大山 祇命

○ 同所ノ本 津利波山 鎮座

一、石 祠 祭神 大山 祇命

とある。頼戸山はかなり奥山で、兒玉勝乙氏所有の土地にあつて、元田から尺間山に登る場合でも、通る人は気がつかない程度の祠である。

井津利波山は、山の入口に当たる。長さ六メートル、縦四メートルばかりの大石の上に自然石を置き、竹筒の中に榊を活けてある程度で、まことに粗末なものである。大石にくっついた二つの巨石で、谷の真中にどっかり坐っている。この二つの大石は、昭和十八年の大洪水の時、すぐ上の砂防堰堤の近くから押し流されたものであるが、うそのように石は大きい。以前は石の祠もあつて、村人が御神酒をおげ、山で傷く人々の安全を祈つたのであるが、右の大洪水で流れ出た大石が、山の神の

信仰の対象となつたものがある。

昔と比べると、ちよんと地籍図もあり、祭神も明らか  
にされておき、村人はこの保護神と道祖神に對して、畏  
敬と感謝の念をもつてお祭りしたものである。

今では、車を通る道が中腹まで延び、山の神とは縁が  
ますます遠くなるばかりとなつた。全く形ばかりの山の  
神で、今昔の感心としおである。

### 火 伏 さん

元田の神々の中で、一番の關心のあるものはどの神だ  
らうかとたずねてみると、火伏さんという声が一番多い。  
その理由は、恐ろしい火災から守ってくれる神であるとい  
うことである。昭和になつて、村には三回の火事があつた。  
その中の一回を除いて、一軒だけで消しとめたのも、広瀬の火伏さんのおかげであると思つてゐる村人  
は、案外多い。

時が経つと、祭の形式も内容も變つてくるものだが、  
今の時代はほんの形ばかりで単純化され、心を失つたもの  
があまりにも多い。私たちに昔の祭の郷愁にさそわ  
れて、湿かい想い出にふけることがあるが、今の子供達  
は、故郷として何と心に植付けるのであろうか。

火伏さんの祭りは、春秋の作祭と組合わせ、その時に  
定めて期日を定めてゐる。祭のさいは竹林と雑木に囲ま  
れた社に、高司宮司をお招きする。村人は祝詞を聞いた  
ちお神漕ぎ渡みかおし、淨い鬼神にひたる行事は昔と  
變らない。ただ蹴前は、老人も子供も、凝灰岩上の広場  
にゴザを敷き、隣りの人とご馳走をかあしたのしんを風  
餐は見られなく空つた。それ山が自然崩壊して広場も  
なくなつた。その人を堤防工事に使用したためである。こ  
うして祭の場所は、川原に移つてしまつた。

火伏さんのある場所、江戸前期庄屋であつた市野瀬  
保彦氏の墓山の墓地の近くにある。このことは火伏さん  
の性格と關係があるので、一見余談のようだが、記録に  
とどめておくことにする。

保彦氏の祖先に当てる第十三代宗洗右兵衛は、本田が  
ら廣保(今川広瀬)に移つた人である。彼は「市野瀬家  
中興家伝系図」を書き残してゐる。これが実貝右の市野  
瀬の實情を知る唯一の資料である。

この資料の中にある火伏に關係のある箇所を抜粋して  
みよう。

当時、屋舖創草の歳は、宗洗が二十九歳の時、寛政  
五年十二月一日独立して之を創草し左ものである。そ  
して同七年三月下旬吉日に依り、同二十九日に移住し  
た。

同寛政八年三月八日の晩、十二時頃衣冠正しい靈人  
が夢の中に立ち、「我は是汝の屋舖より且寅に當つて  
灰石の洞あり。彼所に年久しく住む者である。その証  
に祠三つあり、汝は右の叢祠を同延の地上に祭れ、  
すなわち汝が守護神となりて、永く子孫を繁榮さすべ  
し。」と告げて、靈神は忽然と見えなくなった。宗洗は  
忽ち夢からさめ、これは不思議な靈夢と思ひ、神官高  
司源太夫に靈夢の話をしたところ、靈のお告げに任す  
のがよいと云うので、同年三月十五日、三社を勧請し、  
当所の地を廣保と改めた。

- 若宮八幡宮
- 若宮大権現宮
- 稻荷大明神

右、若宮八幡宮の由来は、右靈夢のよつに、当所は  
梅村の氏神である。  
梅村の者、先年故あつて他所へ移住した時、祭祀

祓の儀を執り行なわなかつたので、和光の靈神は年久しく草むらに埋まっていた。

そうして寛政八年三月に前に記したように、当時杵村に住む右工門と芹談(注、相談カ)とし、当座禰の子丑の方に再興した。勿論、祭礼の儀は、六月十五日および十一月十五日と定める。

若宮大権現は前に記したように、鎮守として勧請する。もつとも御蘭に住す。(注、任すリ誤イカ)  
(右の叢祠は本田天満宮にある)

又稻荷大明神は、子孫繁栄のために勧請し、崇敬するものである。

時は 寛政八年三月十五日

願主 市野瀬右兵衛(宗洗)  
神主 柴田吉政(守門人)  
源太 光

以上の古文書とその才まに受取ると、一つには、この祠は市野瀬家の氏ノ神で、云わば祖先神なのである。しかもそれを裏書きするようには、保秀氏の母親サミさん(祖母)から、次のような話を聞いていたという。

「ずつと以前は、市野瀬家一統だけが集まりお祭りしていたのを、明治が大丘かあからないが、ゴジエウオイサンという村の伍長が、この祠を村の人にお祭りさせてもらいたいと市野瀬家に願い出て、納得すくで今日に至った」云々

いま一つ、愛宕神社との関係である。

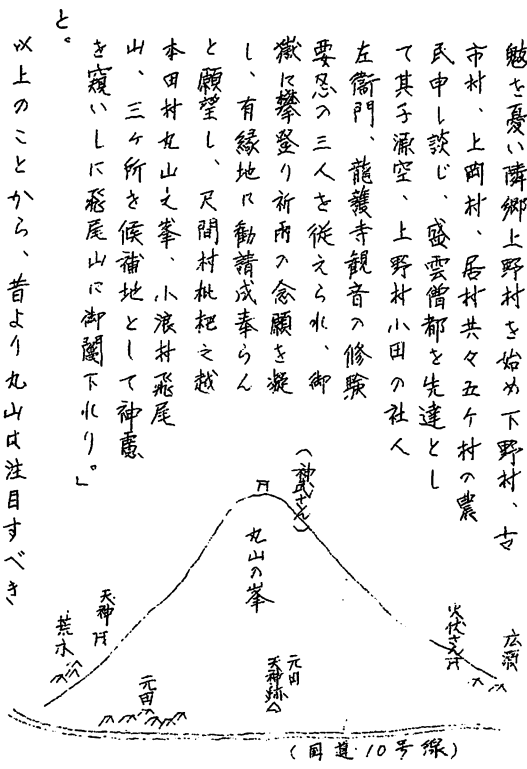
愛宕神社の祭神は迦具突智神・武甕槌神・経津主神である。その中の迦具突智神は火の神を代表する神で、本社を秋葉神(静岡県周知郡大居町)と、愛宕神社(京都都市右京区嵯峨愛宕町)としたもので、全国に多く祀られている。

参考までには、大伏さんが大坂本・尺間地区に、どの位祭られていたかを知るに非常に多いことがわかる。少くとも元田の火伏さんの由来について云え、山の神も天神さんとちがった性格を持っていることは、今述べた通りである。

### 神武天皇

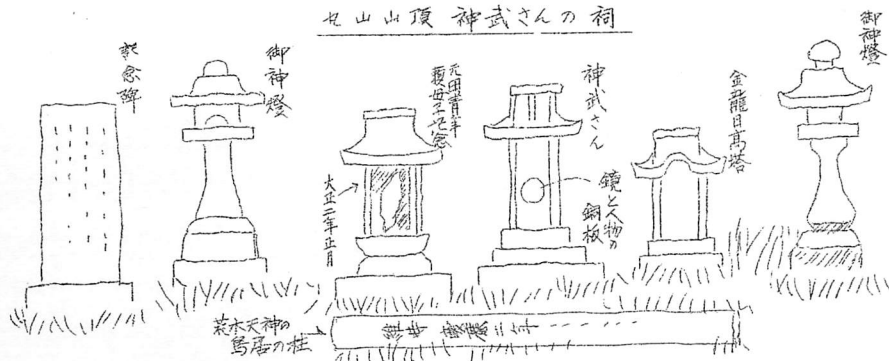
神武天皇をお祭りしている丸山の名が、はじめに記述に出てくるのは、「秋葉愛宕大権現御縁起」の中に書かれた、次の文章である。

「御嶽鎮座より星霜を経ること廿有余年、後陽成天皇の慶長元年中春夏の間百有日、諸國一統に大旱魃にて五穀枯死に瀕し、人畜水に渴し危難に及びぬ。去るに依り諸寺諸山において雨を祈るといえずとも更に驗無し。其頃佐伯表日大田飛驒守楢御支配にて当村の村長は御鱗治即左衛門なるが、早魃を憂い隣郷上野村を始め下野村、古市村、上岡村、居村共々五ヶ村の農氏申し談じ、盛雲僧都を先達として其子源空、上野村小田の社人左衛門、龍護寺親音の修験要思の三人を従えられ、御嶽に攀登り祈雨の念願を凝し、有縁地に勧請成奉らんと願望し、尺間村枇杷之越本田村丸山之峯、小浪村飛尾山、三ヶ所を候補地として神慮を窺いしに飛尾山に御蘭下水利。」



以上のことから、昔より丸山は注目すべき

丸山山頂 神武さんの祠



場所であつたと又てよからう。しかしながら、慶長年間以来明治の初年まで、絶えてその名が聞かれないばかりか、村人が集まって何かを祭つた形跡もない。しかし江戸時代を通じて約三百余年間、そのままであつたときめつけることはまだ早いと思ふ。

さて、現状その丸山の峯神武さんの頂上には、上四のような塔や祠がお祭りされてゐるが、向つて左端の石碑の裏に、この地を神の祭り場所としての経緯が書かれてゐる。あまり上等でない灰石のため、文字が摩滅して十分理解に苦しむ所があるのが残念である。しかし読める部分を示すと、こうである。

一 遙拝所 明治十年  
 児玉角治 基本金十圓  
 先帝 餅散 周城松張  
 元田頼母子講世田 児玉  
 輝喜、児玉忠吉、河野佐吉  
 市野瀬除四氏の提供セル五十四  
 他部落寄附者  
 大正十三年十月十三日  
 高司 隆撰書

少しばかり重複するが、以上の石碑の文字と、児玉角治さんの祭に当る児玉輝喜氏が提供して下さつた文

章とをみて、神武さんの理解を深めることにしよう。そもそも、神武天皇をお祀りしてゐるといふのは、あまり例を聞かない。これはどうしたことであろうか。

思ふに明治の御代になると、庄産の制度はなくなり、村のリーダーも以前と入れかゝることがあるが、元甲に於てもその例はもれず、庄産であつた市野瀬家から、児玉家に財力なり権力なりが移つたと考へてよからう。

時はさうど西南戦争がかたずき、国内は一応安定の方角へ移つた。そして國勢統一の必要から、ずつと天皇制の高揚が叫ばれてきたのである。

その頃、元田村の任長であつた児玉角治が、私心のない奉仕的精神によつて、丸山の頂上に、神武天皇が祀られるようになったいささつが、十分うかがえる。

おおむね民俗信仰の対象となる神には、村の有力者の祖先神であるとか、ある特定の人がお祀りして一般化したものがかなりあるが、神武さんの由来も右のような性格と類似したものと見えるであらう。このことは火伏さんにも云えることである。

お祭にしても、春の祭はこどもち、秋は火伏さんでもったことが戦前からあつた。とくに松を伐つてからは境内が広くなり、見はらしがよいといふので、戦後は何年か続いた。頂上からは、榎松の集落も、愛宕の森も根下に眺められ、天間の方に行く國道が、緑の山裾に見られてよい所であつた。

しかし、時は流れて変つた。村人がご馳走をひらげて樂しむ、子供達が相撲をとつた広場も萱が繁く生え、周囲の雑木も生い立つたため、眼下の風景を見ることがむづかしい。広場の端にテレビのアンテナの塔が銀色に沿ひて、久しぶりに訪れる人を白々しくさせてくれる。

何でも食べられる今日、高い山に汗を流してまで神の前におこもりをする氣にならなくなったと見え、絶えてからすでに十数年を数えている。

### 兒玉輝喜氏の話

昔からの言い伝えに、天間山の神嶽が横松の飛尾山へ愛宕神社へと、天間の杜<sup>ひの</sup>の越と、元田の丸山に神をお祭りする位置として、お選びになつたと云われている。元田の住民は、祖先に対して謝恩の念と敬神の念とが篤く、丸山の頂上に、明治天皇の皇祖神武天皇をお祭りする議が起きた。時は明らかではないが、古来の話では明治十年頃のできごとのようにある。

兒玉角治(兒玉輝喜祖父)は当時村の佐長を勤めていたが、当時米を以て給料としていたのを、現金にかえて給料と受けることにした。彼はその金を神武さんの基金として村に寄付し、その利息を年々お祭りの費用に充當した。

大正末期の頃までは、村の共有金とは別途の会計として計算していたが、時の流れで、同じ村の金であるから別途の会計にする必要はないとして、村の共有金に繰入れたので、このことは自然消滅した。

このお祭りは、春に火伏祭と<sup>ひな</sup>祭、秋に火伏祭と作祭とを同時に行ない、年二回の催しとなっていた。

大正十一年旧正月、村人は協議の上、神武天皇の横に明治天皇のお徳を偲んでお祭りし、この際神様のいなくなつた荒木<sup>あらい</sup>の天神におつたすべての記念の塔を、この地に運び上げたものであらうと推定している。

それから一年過ぎて、愛宕神社の高司隆宮司に辭文とお願ひして、大正十三年十月記念碑を建立した。

神武天皇をお祭りした当時は、兒玉角治の土地を提供

したのであつたが、明治天皇をお祭りする時は、周囲の山林所有者である川野佐吉・兒玉勝三・市野瀨彦・兒玉輝喜の同意を得て、丸山頂上の社地を拡張した。土地の代金は五十田として村に寄付し、外に元田青年頼母子講の金三十田と、村人の寄付により、石の祠と記念碑の費用に当てた。

鳥居は昭和六年十月、市野瀨又(市野瀨善之助)が奉納したものである。又は神仏に対して信仰心が篤く、広瀬の火伏さんにも同形の鳥居を寄付している。

なお、鳥居の前の梅の水は、谷川茂三郎が竹田地方に椎茸製造に行つたとき、持ち帰り植付けたものである。神武さんの境内には、直径三〇センチ、高さ二〇メートル以上の松が十本程あって、元田のシンボルとなつて、だが昭和三十年頃から松喰虫が発生し、枯死寸前となつたので、これを伐り用材とした。これらの松は、頂上付近の山林所有者が奉納したものであるが、その金は村の共有金ともなつた。

(この項おわり)

### 余白

#### 人生わずか五十年

— それはずつとすつと昔の話 —

日本人の平均寿命はまた延びて、男子七十七才女子七十六才と云つた。織田信長は桶狭間合戦に當り、「人間あらずか五十年、代々のうちにはこれ夢まぼろしのかくなり」とか言つて一せし舞つていた。その信長が本願寺で自殺したのは四十九才であつた。

佐伯惟治は三十三才、その子千代鶴は幼少おすかに九才。

今は七才、八才、人生には余命といふものがある。人生のプラスアルファである。統計上男子七〇才の平均余命は尚一〇五才、女子は男子より更に二才ほど長い。

八〇才の男子は、余命五・七五才まだ生きのびる年月がある。それも平均の数字であるから、極端とはたらき次第では、九十才以上生き得る。またまた、お互い何かが出来る。